

放送視聴票 第 6 回 (bijyutu202511 + bijyutu202512)

■ bijyutu202511 : 写真と絵画

【写真がアートを変えた】

カメラ・オブスクーラの原理は古代から知られており、15 世紀以降画家たちが構図や遠近法の補助として活用してきました。19 世紀に写真技術が確立すると、それは記録装置としてだけでなく、絵画制作に新しい視点を与えるものとなります。

ドガやクールベ、アングルなどが写真を参考に作品を描いたことは有名で、特に印象派には多大な影響を与えました。

【写真を作る】

写真には「ありのままを捉える」表現と、「演出する」表現があります。

スナップ写真の巨匠・土門拳が「絶対非演出の絶対スナップ」を掲げた一方、浅田政志は家族をテーマにユニークな演出写真を撮影しています。

どちらも計画性と瞬間性が問われる表現です。

【記録する】

スマートフォンの普及で、誰もが日常の一瞬を記録する写真家となりました。

しかし、ただ撮るだけでなく、「どう撮るか」「何を感じるか」がアートとしての写真には問われます。

構図、光、表情、偶然の出会い。観察力と感性がアートの質を左右します。

■ bijyutu202512 : アートとジェンダー

【性を描く】

長く芸術の世界は男性優位でした。女性がアートを学ぶ機会すら限られていた時代、ベルト・モリゾは第一回印象派展に唯一女性として出展し、その後の芸術史に名を刻みました。

また、韓国の作家ユン・ソクナムは、ジェンダー抑圧への抵抗として作品を制作しています。

【絵筆を持った女性たち】

近代以降、女性の芸術活動は徐々に認められ、メアリー・カサットや上村松園などが登場します。

とはいえ、現代の調査でも美術館の所蔵作品のうち女性作家の割合は 1 割ほどとされ、不平等の構造は依然として存在しています。

【SDGs とアート】

SDGs の 5 番目の目標は「ジェンダー平等の実現」です。

アートは社会課題を可視化する力を持ちます。とくにジェンダー表現は、過去の偏見を見直し、未来を切り拓く可能性をもつテーマです。

芸術が担う社会的責任と役割を、ジェンダーの視点から深めていきましょう。